

## アワビ漁師移民の古文書レスキューと調査活動

粕谷 智美 (NPO 法人安房文化遺産フォーラム)

根本(南房総市白浜町)出身の小谷源之助・仲治郎兄弟率いる房総アワビ漁師らは、19世紀末から渡米し、カリフォルニア州モンレー地域で、器械潜水を導入し、アワビ事業に成功した。彼らの歴史は、これまで水産学者による先行研究や、アメリカ側からの資料で語られてきたが、近年発見された古文書の研究により、渡米前の状況が明らかになり、新たな歴史研究の道が開かれた。

弟の仲治郎は9年滞米の後、帰国し千田(南房総市千倉町)に住んだ。子孫より旧宅を解体したい旨の相談を受けた。NPO 副代表であり、房総アワビ移民研究を進めている鈴木政和氏は、許可を得て、襖8枚を丁寧に剥がした。すると下張りから大量の古文書が見つかった。旧宅は1914(大正3)年に建てられており、見つかった古文書は、実家の海産物問屋「金澤屋」に関わる勘定書類や契約書類、家族友人らと交わした書簡など多岐にわたり、ほとんどが明治期の資料だった。当時不要となった紙類を襖の下地に再利用したと考えられ、千切られた断片(断簡文書)になっているが、貴重な歴史資料の発見となった。

南房総市の市民提案型チャレンジ事業補助金に採択され、2019(令和元)年5月より本格的な調査研究に取り組んだ。大量の古文書を紙質や筆跡別に分類し、封筒に仕分けして目録を作成する作業を進めていた矢先、9月9日に強大な台風15号の直撃を受けた。

資料を保管していたNPO第2事務所の古民家建物は屋根が吹き飛び、全壊してしまった。被災

3日目から、散乱し水損した資料を拾い集めた。1枚ずつ分類していた封筒は中身が散失して空になったものもあった。屋根の残っていたスペースに座卓を積み上げて応急棚を作り、降り続く豪雨を一時的に凌いだ。天気の良い間をぬって、回収資料を近くの廃校舎へ搬送し、水損の軽微なものは広げて乾かすように並べた。

水損の酷いものはカビの心配もあるので、「千葉歴史・自然資料救済ネットワーク(通称:千葉資料救済ネット)」に連絡をとって相談した。2015年の茨城県常総市のような河川氾濫とは異なり、泥まみれというほど酷くはないので、大学の研究室に委託するのではなく、自分たちで復元を試みることにした。助言に従って、水損資料をビニール袋にまとめて入れ、しばらく家庭用冷蔵庫で冷凍保管とした。

その後は、台風被災によるNPO第1事務所の引越や被災者支援活動で多忙となったこともあり、古文書レスキューと調査活動は一時中断となった。半年を経て2020(令和2)年3月に、冷凍保管資料の再生作業をはじめた。奇しくも新型コロナウイルス感染症が広がりつつある時期で、第1回目の緊急事態宣言前ではあったが、水損資料の解凍に伴うカビの飛散にも十分留意して作業を進めた。

まず、前日から自然解凍しておいた水損資料をビニール袋から出し、ヘラを用いて丁寧に剥がした後、新聞紙に挟んで布団圧縮袋に入れて掃除機で吸水し、これを数回繰り返して乾燥させ、原状回復に成功した。



レスキューした古文書の調査はゼロからの再スタートとなった。研究チームは、館山市立博物館の古文書講座を受講したメンバーが中心となって、再び紙質や筆跡別に分類・封筒に仕分け・くずし字の判読・データ入力・目録作成と作業を進めた。さらに博物館の学芸員の協力を得て判読の添削を行い、精度を高めた。

台風被災で回収できずに散失したものもあり、さらに倉田白羊が描いた4枚の襖絵からも新たに下張りの古文書を取り出し、合わせて約1,000枚にのぼった。その中から、書簡を中心に目録作成まで完了したのは530枚。1枚1枚の内容を完璧に解読することは不可能だが、地名や人名などを精査しながら研究を深めてきた。

古文書類は、家族や友人らと交わした書簡、金澤屋の勘定書や貸付に関わるもの、水産物仲買人や乾鮑生産者、清国貿易関係者等との商取引に関するものなど多岐にわたる。金澤屋の店主であった小谷清三郎(1845-1910)は、海産物問屋の事業家というだけでなく、1907(明治40)年まで長尾村の議員を務めていた。明治初中期から子弟に高等教育を与えていることは特筆すべきことである。慶応義塾幼稚舎に就学中の源之助と父清三郎との書簡などはたいへん興味深い。

清三郎・たよ夫妻は、留守中の自宅と出張先で頻繁に書簡を交わし、商売の状況や子どもの教育についてなど細かに報告・相談をしている。清三郎や渡米前の源之助らは、新潟の佐渡や秋田の能

代などに出向いて就漁あるいは乾鮑の加工技術などを指導していたこともわかった。

金澤屋の支店は、根本に隣接する布良(館山市)にもあり、布良郵便局から為替送金したことなども記されている。マグロ延縄船発祥の漁村として栄えていた布良は、近代水産業の発展において重要な役割を担っていた。青木繁『海の幸』誕生の地としても知られている。また、松岡(館山市)出身で銀座資生堂創業者の福原有信やその縁者などとも親しい関係にあったことが見えてきた。仲治郎の水産伝習所同窓生や水産会、農商務省関係者等とのネットワークなども、明治期の殖産興業を考えるうえで貴重な資料として、研究に期待が寄せられている。

NPO 共同代表の愛沢伸雄氏は、論文「明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流～小谷源之助・仲治郎兄弟と金澤屋の人びと」3部作を執筆している。下記 NPO のサイト(二次元コード)より読むことができる。

<https://awa-ecom.jp/bunka-isan/section/paper-010-100/>

【目録作成済(内訳)】

A	書簡	387
B	契約書	8
C	送り状	12
D	勘定書	103
E	その他	17
計		527



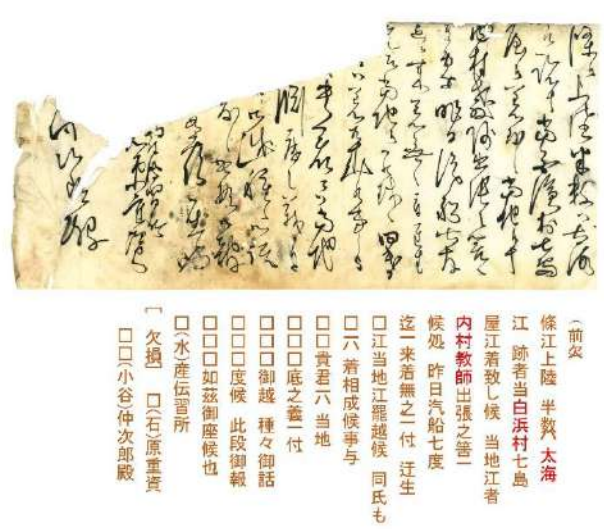
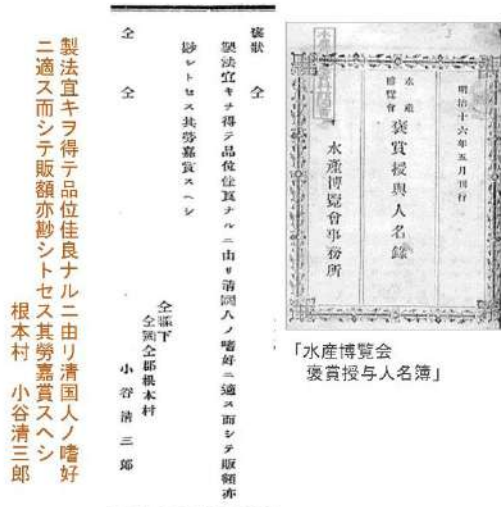
<水損資料の再生作業>



- 冷凍
- 半年後に自然解凍
- へらで小分け
- 新聞にはさみ、圧縮袋で
- 真空脱水 ⇒ くりかえす
- 並べて乾燥し、原状回復



## 小谷清三郎の乾鮑製造と水産伝習所の白浜実習



【書簡】年月日未詳  
水産伝習所 石原重資より小谷仲次郎宛  
「太海白浜等江到着井内村教師出張二付御報」  
A-173

### <解説>

1890(明治 23)年8月、水産伝習所(現東京海洋大学)の夏期実習が初めて白浜村(南房総市白浜町)で開かれた際、伝習所教師であった内村鑑三が引率同行している。自著全集の「予が聖書研究に至りし由来」には、隣接した布良(館山市布良)の神田吉右衛門と毎日語り合ったことが契機となって教員を辞し、キリスト者として生きる決意をしたことが記されている。同年は、根本出身の小谷仲治郎が伝習所第3回生に在籍してお

り、父・小谷清三郎は第3回内国勧業博覧会の水産部門において乾鮑(明鮑)製造で褒賞されていることから、伝習所書記の石原重資より実習への協力要請があったのではないかと推察される。このとき布良では、後に画家・青木繁の滞在を受け入れた小谷喜録がマグロ延縄の漁具の実習指導をしており、伝習所長・関澤明清から贈られた感謝状と「日本重要水産動植物之図(農商務省制作)」が今も同家に残っている。

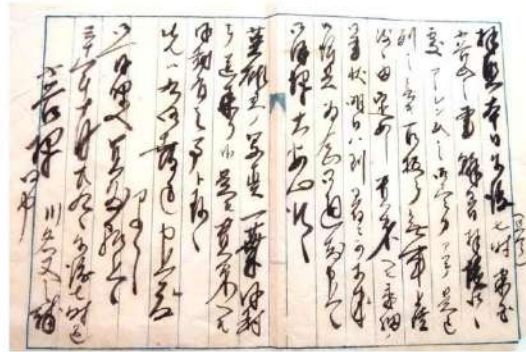
## 共同経営者アーレンと小谷源之助・仲治郎

### <解説>

渡米した小谷源之助・仲治郎兄弟は、2年後独力で潜水器鮑漁業を始めようとしたものの、排日機運が高まるなか、日本人の採鮑禁止法案が審議される困難な状況にあった。

モントレー・ポイントロボスの地主A.M.アーレン(建築家で銀行家でもあった)は、二人の事業に理解を示し、アーレンが名義人になったことで禁漁を免れた。そして1902(明治35)年、アーレンの出資と名義により、共同してポイントロボス缶詰会社を設立し、事業を拡大していった。

1904(明治37)年、源之助は日本にいる後妻のふく(22歳)と長男英雄(1歳)の二人をモントレーに呼び寄せた。書簡にはアーレンが渡米への口利きをしたので、前例がない取扱いを受け無事渡米できたと書かれている。当時、日本人移民の排斥が高まっているなかで、公私ともに源之助・仲治郎兄弟を支援するアーレンという人物がいて事業継続が可能であった。なお、渡航記録を見ると小谷清三郎の五男・勝良と宇山與助(神戸村犬石)が同行していた。



【書簡】明治三十七年十月二十九日 川名又之輔より小谷宛  
「アーレン氏尽力に依り無事上陸之件二付書簡」  
A-35



拝啓 本日午後七時(只今米國小谷氏之書翰着 拝読仕候 如アーレン氏之御尽力アリテ是迄列例之無キ取扱一テ無事上陸致候由 定めし貴家 も委卿御書状明只到着一可相成候得共 為念御通知申上候 御同様大安心仕候 英雄君ヲ写真一葉同封ニテ送來り候 是も貴家王同封有之事と存候 先 右御報迄申上度 早々 御一同様 宜敷願上候 三十七年十月二十九日 午後七時過 小谷様御中 川名又之輔

前列中央が源之助の妻・小谷ふく  
右の赤子が長男の英雄、渡米時の記念写真  
左は A.M.アーレン

